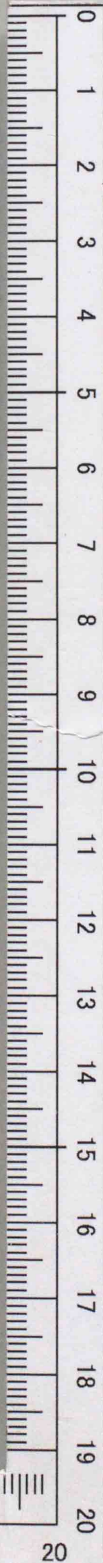


3759  
Mo14  
資料室

高等小學讀本卷二  
女子用  
文部省



41667

教科書文庫

|                |
|----------------|
| 4              |
| F10            |
| 32-1940        |
| 20000<br>39754 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

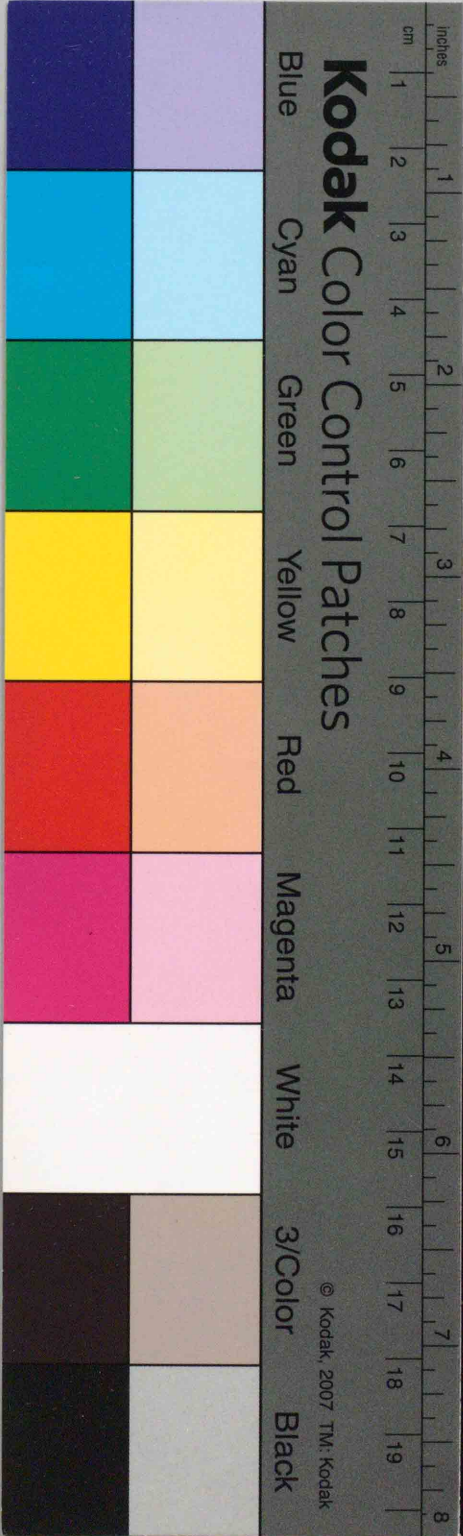


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

3959  
Mo14



高等小學讀本卷二



女子用

文部省

目録

|       |             |     |
|-------|-------------|-----|
| 第一課   | 農業          | 一   |
| 第二課   | 堀田瑞松        | 四   |
| 第三課   | 月の光         | 八   |
| 第四課   | 鎮守に詣でて      | 十   |
| 第五課   | 社會奉仕の精神     | 十二  |
| 第六課   | 國字四書        | 十七  |
| 第七課   | 猫の垣巡        | 二十一 |
| 第八課   | グロチウスと夫人マリヤ | 二十七 |
| 第九課   | 鯨釣          | 三十四 |
| 第十課   | 保険          | 四十二 |
| 第十一課  | 人を紹介する手紙    | 四十七 |
| 第十二課  | エジプトの遺蹟     | 四十九 |
| 第十三課  | マルコ、ポーロ     | 五十三 |
| 第十四課  | 植物と氣象       | 五十九 |
| 第十五課  | 歳末の十日       | 六十三 |
| 第十六課  | 俳句          | 六十七 |
| 第十七課  | 都會と田舎       | 六十九 |
| 第十八課  | 上毛の三山       | 七十二 |
| 第十九課  | 日光の杉並木      | 七十七 |
| 第二十課  | 日光山         | 八十  |
| 第二十一課 | 一年の折々       | 八十二 |
| 第二十二課 | かんにん        | 八十六 |
| 第二十三課 | 機           | 八十七 |
| 第二十四課 | 海苔          | 八十九 |
| 第二十五課 | 福澤諭吉        | 九十八 |
| 第二十六課 | 品物の不着につきて   | 百二  |
| 第二十七課 | 故郷の花        | 百四  |
| 第二十八課 | 鳥の翼と昆蟲の翅    | 百九  |
| 第二十九課 | 日本の婦人       | 百十一 |
| 第三十課  | 學校園         | 百十五 |
| 第三十一課 | 世界の望        | 百十八 |

高讀女二

高讀女二

高等小學讀本 女子用卷二

第一課 農業

農業はあらゆる職業の中で、最も身體を健康にするものである。世の中には、日の目も見ずに仕事場で働く者もあれば、一步も机邊を離れないで、事務に忙殺される者もあるが、農業に従事する者は、終日すがくしい大氣を吸ひ、快い日光を浴びながら労働する。人世に於て、これほど人の健康に適する職業が他にあるであらうか。

身體の健康に適する農業は、又よく精神を健全にする。



農業によつて先づ養はれる徳は、着實であり、勤勉である。如何にあせつてみたところで、昨日植ゑた苗が今日實のるものではない。或男が、田植の翌日から毎朝稲を少しづつ引張つて、早く成長させようとしたら、やがて枯れてしまつたといふ笑ひ話もある。一足飛は農業の禁物である。しかも唯自然に任せて氣長く待つてゐるばかりで、作物は出来るものではない。人力の限を盡くして始めて自然に任せる、そこに自ら勤勉着實の美風も養はれるのである。

農業は最もよく家庭の和樂を與へるものである。耕すにも、種を蒔くにも、肥料を施すにも、除草するにも、一家

總出で働くから、家内各自が其の職業を理解し、隨つて彼等の間に美しい同情の念が起る。夕飯の膳に向ふ時、互に慰め合ふことの出来る彼等は、一日の勞苦をこゝに忘れて、一家一心の妙趣を十分に味はふことが出来る。

農業は最も趣味に富んだ職業である。終日自然を友として働いてゐる農夫は、又忠實な自然の觀察者である。しかも彼等は唯傍觀的に自然を樂しむ風流者ではない。深い同情の念とあらゆる辛苦とを以て、木を植ゑ、田畑を耕す。其の勞作によつて、山は愈、其の美を發揮し、野は益、其の趣を添へる。

斯く觀じ來れば、農業は實に堅實にして幸福な職業である。

第二課 堀田瑞松

堀田瑞松は彫刻鐵筆をもて聞えたる人なり。久しく京都御所の御用を務めけるが、或時數多き人々の中より選ばれて、水晶の置物を載する臺を作れとの命をかうむりぬ。

瑞松此の名譽ある御誼を拜して、思案に思案を重ねたる末、其の置物が數個の水晶なれば、臺も水に縁ある波の形こそよけれとて、うづまく波の間より、此處彼處に水晶の浮かび出でたる如くせんと工夫せり。されど波

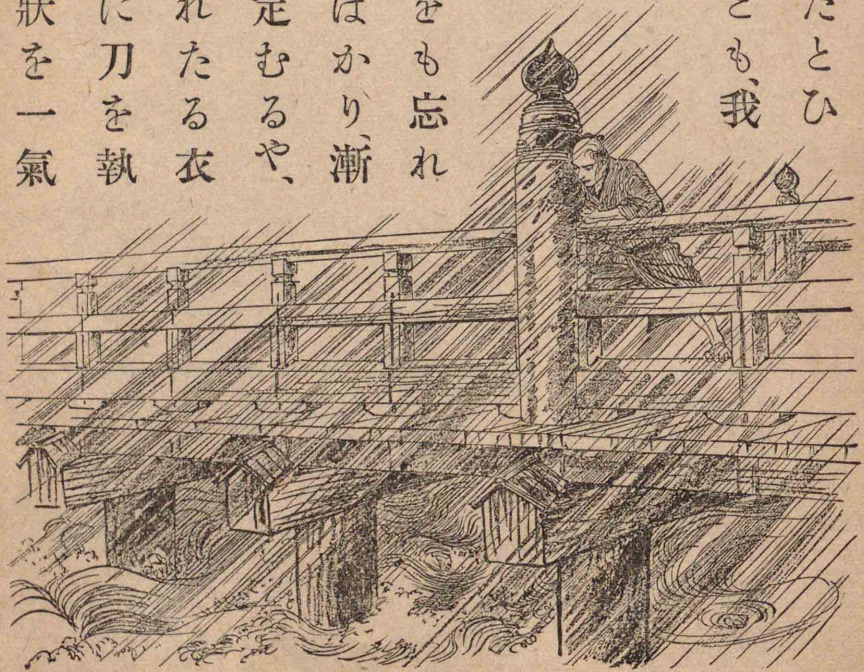
の形たるや、千狀萬態、或は集り或は散じ、或は飛騰し或は落下し、變幻出沒極りなきものなれば、居ながらにして其の妙趣を捕らへんことは容易の業にあらず、如かず、實物に接して自然の姿態を寫さんにはと、或は須磨明石の海岸を傳ひ、或は鳴門の瀬戸に船を浮かべて、ひたすら心になふ波の形を見んと力めたり。されども遂に發見すること能はず、煩悶數十日にわたりぬ。折しも京都大いに雨降り、河水氾濫し、橋落ち家流る、慘狀を呈せり。瑞松心に思ふ節やありけん、家人のとむるをもさかはず、盆を覆す猛雨を衝きて、三條の大橋へと急ぎ行けり。

さて瑞松は一もくさんに馳せて橋上に至らんとせしに、此の時橋は既に危く、今にも落ちんばかりなりければ、警戒の者はいつか其の通行を許さず。されど技に熱心なる瑞松は、さばかりの事に志をくじくものにあらず、御所の御用を務むる某といふ者なり。御用のため、命に懸けても、此の橋上よりうづまく波の有様を調ぶる必要あり。此の儀特に許さるべし。とて、強ひて其の許を得、雄々しくも橋の中央に進み、欄干に倚りて一心不亂に水面を眺めたり。斯かる中にも、風益加り、雨愈烈しく、遂には橋げたもゆらくと浮動し始めぬ。警戒の者どもは此の有様に、危しく、疾く逃げよ。としきりに

高讀女二

高讀女二

注意したれども、瑞松はたとひ身は水中の藻屑もがらとなるとも、我が心にかなふ波状を見極めざる上は、一步も退かじとて、呼べど叫べど少しも動かず。身の危きをも忘れて見つむること一時間ばかり、漸くこれぞと思ふ形を見定むるや、急ぎ我が家へ馳歸り、ぬれたる衣服を脱ぎもやらで直ちに刀を執り、記憶に新なる波濤なみの状を一氣



に刻み上げぬ。それより瑞松は之を見本として、更に十  
數日を費し、壯麗なる置物臺を作りて之を御所に納め  
けるに、叡感殊に斜ならず、從來は自ら謙遜して寸松と  
號せしを、以後瑞松と稱すべしとの御詔をさへ賜はり  
たり。

瑞松常に人にいひて曰く、我はかつて人に師事せしこ  
地神とらつてつこちこちあり  
まうはさる(む)あちあち  
となし。我が師は即ち自然なり。造物の妙趣、之を採りて  
以て我が有となすべきのみ。と。(和田垣謙三、兎糞録ニ據ル)

第三課 月の光

月の光は温和で、日光のやうに強烈ではない。日は赫々  
として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親し

高讀女二

高讀女二

み易い。太陽が一度出れば、善惡美醜悉く照破されるが、  
月は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の分別を失はせて  
しまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱  
を伴はない清涼の光である。休息安靜の夜に最もふ  
さはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ず  
る、詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて  
ゐる熱帯の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘  
れる。熱國の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は  
違ふであらうが、月光の人心にしみ渡ることは、恰も其  
の影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。  
うち向ふ月は一つの影ながら

浮かぶは千々の思なりけり

東西古今、憂愁苦悶種々の思は、幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を讚歎し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に満ちくゝてゐる。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。此の冷たい光が、古往今來、どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。（芳賀矢一月雪花ニ據ル）

第四課 鎮守に詣でて

一

荒野拓きて

村を起しし

祖先の遺業

多かる中に、

先づこそ仰げ、

村の鎮めと

いつきまつれる

鎮守の宮居。

二

鳥居くゞりて

登る石段、

一足毎に

心さわやぎ、

鈴を鳴らして

かしはでうてば、

神々しくも

こだまに響く。

三

神の御ほこと

社頭に高き

杉の大木を

仰ぎて立てば、



此の木植えけん  
心さながら

昔の人の  
心に通ふ。

四

代々を重ねて  
鎮めといます

榮行く村の  
神の御前に、

いでや、誠の  
祖先に恥ぢぬ

心捧げて、  
勳たてん。

第五課 社會奉仕の精神

人は孤立して單獨に生活し得るものにあらず。一の社會をなして共同生活を營むにあらざれば、其の安寧と幸福とは得て望むべからず。共同生活を營む上に於て

最も尊ぶべきは、己の利益を犠牲としても、公共の福利を増進するの精神なり。之を稱して社會奉仕の精神といふ。

社會の福利を増進せんがためには、吾人の爲すべき所甚だ多しといへども、其の第一歩は、互に他人に迷惑をかけざるにあり。道路を行くには必ず左側を歩むが如き、集會面會の時間を嚴守するが如き、道路河水に汚物を棄てざるが如き、皆是なり。次には公共物を大切にすべし。神社佛閣・公園・共同井戸・共同便所等一般公衆の爲に存する物は、よく其の存在の目的を解して、つとめて之を保護し、かりそめにも破壊し、又は汚損するが如き

ことあるべからず。尙進んでは他人の利便をはかるべし。汽車・汽船・電車等の中にて、老人・小兒などの座席なくして當惑せるときは、直ちに席を譲り、道路に往來の妨となるべき石塊・木片等の散らされるときは、之を片附くるなど、日常容易になし得らるゝこと、數ふるに暇なかるべし。

英國少年義勇團の綱領に曰く、

團員は他人を助け、他人に對して有用なるべし。

自己の快樂は勿論、其の安全を犠牲にすとも、他人に對して有用ならんことを期せざるべからず。若し事に當りて處置に迷はば、先づ他人の利害如何

を考へ、他人の利益を増進するの途を選ぶべし。常に他の危急を救ひ、傷病者を助くるの用意なかるべからず。毎日必ず他人のため一の善事を爲さざるべからず。

と。他日りつばなる國民とならんとする者は、少時より常に此の意氣精神を持せざるべからず。

進歩したる社會に於ては、社會と個人との關係密接にして、公益は私益と不離の關係を有す。公益をはかるは即ち私益をはかる所以なり。而して公益をはかるの第一歩は、各、自己の職業を通して社會に貢獻するにあり。職業は個人が社會の活動の一部を分擔して社會の繁

榮を致すの道なれば、各自責任を以て之に當らざるべからず。もし職業を以て己一個の利慾をほしいまゝにするの手段となさんか、社會は各自の職業のために、却つて其の幸福と安寧とを破壊せらるゝに至るべし。吾人は己の職業によりて社會に貢獻すると共に、社會の福利の増進を直接の目的とする社會事業を尊び、之を助けて其の發展をはからざるべからず。即ち學校、圖書館、病院、養老院、孤兒院等に對しては、皆出來得る限り之を援助するの心掛肝要なり。

凡そ文明國の國民たる者は、よく共同生活の眞意義を會得し、日常の生活の上に、各自の職業の中に、常に崇高

納得

高讀女二  
高讀女二

犧牲的精神  
公民的精神

なる奉仕の精神をこめて社會に盡くし、變に臨みては一身を犠牲にして敢へて顧みざるの信念を持せざるべからず。

第六課 國字四書

五子  
大正  
中

出羽國米澤上杉氏の家臣黒井四郎左衛門の娘に繁乃といふ者ありき。七歳にして父を失ひ、母の膝下に人となりしが、後、夫を迎へて一子信藏をまうけぬ。然るに間もなく夫病に臥して、心をこめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅に出立ちたり。繁乃時に年僅かに二十。齡一つのみどり子を抱へし上に、年老いたる母のあるあり。殊に主二代まで引續きて早世しければ、自ら食祿も

減ぜられて、生計にも事缺くこと多かりけり。されど繁  
乃はよく此の困難に堪へ、或は羽織のひもを組み、町  
に賣り、或は機織、絲繰などして僅かの賃錢を得、よく母  
に仕へ子を慈むこと年重りければ、遠近の人々こを聞  
傳へて、ほめ感ぜぬ者はなかりき。

信藏七歳の頃、繁乃、隣家なる糟谷某に就きて四書を學  
ばしめき。されど我が身は僅かに假名文字を知れるば  
かりなりければ、子を賢からしめんとせば、己先づ賢か  
らざるべからず。我文字に明らかならずして、いかでか  
我が子の誤れるを正し、疑はしきを明らかめ得べき。今よ  
り學ばんも遅からじ。とて、其の後は信藏のもの學びに

高讀女二

高讀女二



行く毎に、己も亦隣家の窓のもと  
に立ちつゝ、もれくる師の聲を聞  
くがまにくく、假名もて密かに書  
寫しぬ。斯くて信藏歸り來て復習  
する時、此處は斯くくくと改めよ。  
其處はしかくと讀まんぞ正し  
き。と、絶えず傍にありて教へ  
導きしが、斯くすること二年  
ばかり、遂に四書を悉く寫し  
果てたりとなん。  
其の後信藏は藩の學校興讓

館に入りしが、常に深く母の苦心を心にしめ、拮据<sup>こつこ</sup>勉強<sup>けんきゆう</sup>少しも怠ることなかりしかば、學業大いに進み、後には重き職に就くに至りぬ。信藏、彼の假名書きの四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく紙魚のすみかとなさんを惜しみ、強ひて母に請受けて、國字四書と名づけ、喜ある毎に先づ此の書をいたゞきて、厚く其の恩を謝したりとぞ。此の書今も傳へて其の家にあり。

世の中に思あれども子をこふる思にまさる思なきかなとか、子を思ふは人の親の常とはいひながら、斯くばかり真心もて其の子をおふし立てしもの、思ふに世に

は少かるべし。あはれ此の繁乃こそ母の鑑ともいふべけれ。

## 第七課 猫の垣巡

主人の庭は三方竹垣<sup>たけがき</sup>を以てしきられてゐる。正面は八九間もあらう。左右は雙方共四間に過ぎぬ。我が輩<sup>わがら</sup>のいはゆる垣巡といふ運動は、此の垣の上を落ちないやうに一周することである。これはやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くとお慰<sup>なぐさ</sup>になる。殊に處々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、ちよつと休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三べんやつてみたが、やる度にうまくなる。うまくなる度におも

しろくなる。四へん目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正して止つた。これは無禮なやつだ。人の運動の妨をする殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の垣へ止るといふ法があるものかと思つたから、通るんだ。おい、のき給へ。」と聲をかけた。真先の鳥はこちらを見て、にや／＼笑つてゐる。次のは庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹でふいてゐる。何か食つて来たに違ひない。

我が輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、なるほど感じの悪いやつだ。我が輩がいくら

待つてゐても、あいさつもしなければ、飛びもしない。我が輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと我が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢をかへただけである。地面の上なら其の分に捨置くのではないが、如何せん、たゞさへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて又立止つて、三羽が立ちのくのを待つのもいやだ。第一さう待つてゐては足がつかない。先方は羽のある身分であるから、こんな處には止りつけてゐる。随つて氣に入れば何時までも逗留するだらう。こつちはこれで四

へん目だ。たゞさへ大分つかれてゐる。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物しやうぶつがなく、てさへ落ちぬとは保證が出来ないのに、こんな黒装束が三つも前途をさへぎつては、容易ならざる不都合だ。いよ／＼となれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。めんだうだからいつそさやう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、殊には此の邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつにとがつて、何だか天狗てんぐの申子のやうだ。どうせたちのよいやつではないにきまつてゐる。退却が安全だらう。餘り深入をして萬一落ちてもしたら、なほさら恥辱だと思つてゐると、左向けをした

烏が「あはう」と言つた。次のもまねをして「あはう」と言つた。最後のやつは御丁寧にも「あはう／＼」と二聲叫んだ。如何に温厚なる我が輩でも、これは看過出来ない。第一自己の邸内で烏輩に侮辱されたとあつては、我が輩の名前にかゝはる。決して退却は出来ない。諺にも烏合くわがの衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸をすゑて、のそ／＼歩き出す。烏は知らぬ顔をして、何かお互に話をしてゐる様子だ。愈かんしやくに障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目にあはせてやるのだが、残念な事には、いくらおこつてもものそ／＼としが歩かれない。

漸くのこと、先方を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合はせたやうに、いきなり羽ばたきをして、一二尺飛上つた。其の風が突然我が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、ついふみ外してすくと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の處に止つて、上から嘴を揃へて、我が輩の顔を見下してゐる。づぶといやつだ。にらめつけてやつたが、一向きかない。背を圓くして少々うなつたが、やつぱりだめだ。

考へてみると無理のないことだ。我が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫なら此のくら

高讀女二

高讀女二

ゐれば確にこたへるのだが、あやにく相手は烏だ。烏の勘公とあつてみれば致方がない。機を見るに敏なる我が輩は、到底だめだと見て取つたから、きれいさつぱりと縁側へ引上げた。(夏目金之助「吾輩は猫である」ニ據ル)

## 第八課 グロチウスと夫人マリヤ

フーゴー、グロチウスはオランダの有名な法律學者で、實に國際法學の開祖である。

彼は十四歳で大學を卒業し、十六歳で法學博士の學位を得た。さうして二十四歳の時には、既に國政の樞機（すゐき）に參與する身となつた。其の妻マリヤと結婚したのは、其の翌年のことである。斯くて内には好配を得、外には一





世の聲望を擔つて、彼の前途は實に洋々たるものであつた。しかし此の得意の生活も、數年の後には一變してしまつた。オランダには宗教上政治上の紛争が起つて、國內は甚だ混亂を極め、彼は反對黨のために捕らへられて、レーベスタイン城に終身幽閉される事になつた。

此の大難に當つて、今まで隠れてゐた夫人マリヤの才能は、忽ち輝き出した。グロチウスがレーベスタイン城に護送される時、マリヤは再三歎願して、家族全部城内に移り住む事を許された。初は監視

高讀女二

も頗る嚴重で、一步も城外へ出ることを許されなかつたが、後には大分寛大になつた。



グロチウス一家は城内に二年を送つた。夫は孜孜として書を読み筆を執つて著述に餘念なく、妻は生計費の調達と夫の世話とに力を盡くした。監視の番兵も此の様を見て多少安心し、警戒も自然ゆるみ勝になつた。あにはからんや、此の時マリヤの胸中には、夫を逃す計畫が既に熟してゐようとは。

城から二十四五町の處にゴルクムといふ町がある。マ

リヤは一週二回づつ其處へ行くことを許されてゐた。主な用事は、グロチウスが友人から借入れる書物の取替と、洗濯物の出し入れなどであつた。さうしてそれ等の品物を運ぶには、何時も同じトランクを用ひてゐた。番兵は、初の中こそトランクの内容を一々検査したが、何時も怪しい事がないので、後には蓋も明けて見ないやうになつた。機を見るに敏なマリヤは、此のトランクを利用して夫を逃さうと決心した。恰もよし、守備隊長が公用で二日一晚留守になることになつた。そこでかねての計畫をいよく、實行することにした。

隊長が出發した日の夜、マリヤは其の夫人に面會して、

「夫が勉強し過ぎて健康を害しましたから、當分書物を遠ざけたいと思ひます。それで明日書物を城外へ持出させますから、お含み置き下さい。」と話した。夫人は少しも疑はずに承諾した。

そこで翌朝マリヤはグロチウスをトランクに入れて、之を番兵に渡した。番兵は、隊長夫人から話もあつたし、且グロチウスは病氣で寝てゐるといふことなので、其の姿が室内に見えないのも怪しまず、其のまま二人がかりでトランクをかつぎ出した。マリヤは夫が病氣だからと稱して、エルゼといふ女中だけを附けて出した。此の女中は主人に劣らぬしつかりした女であつたと

見えて、トランクが川船に積み重ねられてゴルカムに運ばれるまで、手荒に取扱はれぬやう注意を怠らなかつた。ゴルカムで船から揚げる際、船頭が、何だか生き物がはいつてゐるやうだ。といった時に、エルゼは即座に、書物だから命も魂もありませうさ。と紛らしてしまつた。

逃れ出たグロチウスは、石屋に變装してゴルカムを出発し、途中いろくの危険を冒して、翌日、アンベルスに逃込んだ。其處から彼はオランダ國會に書を送り、冤を訴へ、且愛國心の變ることなきを表白し、直ちにパリーに去つた。

グロチウスが城を逃れ出たことは、其の日の夜まで露

見しなかつた。守備隊長が歸城した時、其の日一日グロチウスが姿を見せなかつたと聞いて、不安を感じたか、わざ／＼其の部屋に來た。そこでマリヤは、夫を脱走させたことを白狀して、罪科を乞うた。隊長は驚いて直に追手を出したが、もう遅かつた。こゝに於て、マリヤに對する處分の問題が起つたが、オランダ政府は其の義烈に感じて、遂に之を放免した。やがてマリヤはパリーに來て、また夫と一しよに暮した。

パリーに於ける生活は困苦缺乏一通りではなかつたが、これがために志を屈するやうなグロチウスではなく、これがために夫に心配をかけるやうなマリヤでは

なかつた。二人は互に勵まし勵まされて、著述の繼續をはかつた。其の中に追ひ／＼彼の境遇に同情して之を助ける人も出來たので、仕事は益はかどり、遂に西曆一千六百二十五年に至つて、戦争及び平和に關する法と題する國際法の大著述が刊行されることになつた。此の書は實にグロチウス夫妻二十年間の苦心の結晶である。

## 第九課 鰮釣

良い時候だ。陸の方から北風がひやり／＼海面を撫でて、船底をたゞく程のゆるやかな波を立ててゐる。鱗形の雲が、天心から東南の方にかけて、銀色の波を大空の

みどりにうたせてゐる。海は其の影を浮かべてゆらめいてゐる。富士江の島足柄箱根眞鶴崎、伊豆の天城山は、西日の光にはつきりと際立ち、左の方を見ると、近くて葉山、遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中程には、伊豆の大島がほのかに見える。白帆が其處此處に五つ六つ大島の方角に、點のやうに一の字のやうに見えるのは、鰮を釣る船であらう。名島の方では、たこを突くのか、時々針程の竿が空を突いてひらめく。其のこちらには、長い竿でさよりを釣つてゐる船が見える。それ竿を上げた。さよりがきらりと光つて船にをどり込む。何時何處から湧いて來たのか、笹の一葉に黒

蟻二つ載せたやうなものが見える。船だ。黒蟻と見たのは二人の男で、せつせと漕いでゐるのだ。其の黒い姿が、櫓を押す拍子に、一つになつたり、二つになつたりしながら、次第に大きくなつて来る。

秋だ、秋だ、實に秋だ。つい後の逗子の山々も、氣のせゐるか少し鳶色になつたやうだ。不動様のあたりに頻にもずの鳴くのが聞える。葉山から逗子のステーションに通ふがた馬車のラッパの音が聞える。

獵銃が無いと見くびつたものか、四五間先へ鷗が一羽下りて、時々水にくぐつては魚をくはへて出て、人間は不器用なものだ。と、さもあざけり顔に、こちらを向いて、

胸を突出して、ゆらく、波に浮いてゐる。

さうする中に、笹の一葉と見えた船は次第に近く漕いで来て、我々の船から三四十間離れた處に碇を下して釣始めた。さよりを釣つてゐた船も一艘、其の側に寄つて来た。我々も碇を上げて、船を其の方に移した。

「どうだね、ぢいさん、鱒は……。」

「さうさね、やつと二つ三つ釣りましたよ。」

さあ氣をつけると、我々は争うて絲を下し、今や手答があるかと待つてゐると、二十間ばかり向ふの波の上を、だしぬけにびん／＼ととんで行くものがある。

「かますかね。」

と一しよに來た甲君が尋ねると、

「なあに、車蝦クルマエビですよ。鱸うなぎに追はれたんだね。」

と答ふる言葉の下から、一艘の船は手早く碇をぬいて、手早く櫓を押して、手早く竿を取出して、頻に鱸を釣らうとしたが、思はしくないと見えて、また漕戻して鰻釣にかゝつた。

つるべ落しといふ秋の日は、箱根の山に落ちかゝつて、富士の頭ははや紫に染まつて來た。風はすつかりないで、落日の影がゆらくと水の上に金を流してゐる。もずも鳴き止んで、陸の方に烏の聲が聞え始めた。實に靜かな秋の夕だ。空高く海廣くして、風なく波なく、夕日の

光獨り此の間に満ちてゐる。

忽ちからんと、甲君の鈴が一つ鳴つた。と思ふと、からんからんりんくと、二つ三つ四つつゞけざまに鳴つた。來たなと思つて見てゐると、繰上げる絲の末には、果して鶯うぐいす茶の背に、銀色の腹をした、目の大きな、口の透通つた、五寸ぐらゐの鰻が、をどりながら上つて來たと見る中に、自分の指先に懸けて置いた絲がびくりしめた。絲を手繰ると、重い。大きいぞ。それ上つた。まる鰻だ。一尺はたつぷりあらう。

さあ釣れ出した。三艘の船が三の字に並んで、餌をつけ、はふり込む。手繰るはや薄暗くなつた水の上へのび

かゝつて、繰下し、引上げる。隣の船でどぶんとおもりを  
はふり込む音、こちらの船で手繰る絲の舷かたにきしる音、  
釣上げられた魚の、ばた／＼船板の上にはねては生簀いひす  
の水にはね込む音。

「いや、こいつは大きい。ちよ、ちよつと、其のたもを。」

と甲君があわたしく叫んだ。すくひ上げたのを見る  
と、何だ、めばるの大きいやつだ。

「とう／＼かゝつたな。」

と乙君が胴の間で獨言するのを見ると、黒鯛くろだじを釣上げ  
てゐる。さつきまでは餌を廻つてなかく、食はなかつ  
たが、遂に夕陰になつて眼がくらんだと見える。

三人は再び沈黙にかへつて、また暫く釣つてゐると、大  
方葉山の寺でつき出したのであらう、暮の鐘が一つぼ  
うんと海面に響いて來た。

「どうです。もうしまひませうかね。」

と甲君は空を仰いだ。

「さうですな。」

とあき足らぬため息一つ。目を上げると、何時の間にか  
日は入つて、富士から豆相の連山は入日の後の卵色の  
空に藍色の波をうねらして、まだはつきりと輪郭りんかくを見  
せてゐるが、つい其處の葉山、逗子の山々には、既に夕も  
やがかゝつた。大島はもう見えな。鰻船の歸るのであ

らう、船は見えぬが、えつしよくくくと櫓拍子が遙かに聞える。

他の二艘も碇をあげて歸りかけた。我々も道具を收めて、富士に見送られながら、紫流す水を緩やかに分けて行く。もう暮れた。海の上はまだ明るいが、行く方は、濱も松林も人家も夕食の煙も山もぼうつとした一色にとけ合つて、唯ぼんやりとしてゐる。櫓聲の絶間を、三聲四聲雁が高く鳴いて通つた。徳富健次郎「自然と人生」二據ど

## 第十課 保険

人は何時どんな災難にかゝるかわからない。多額の費用を投じて新築した家が、火災のために時の間の煙と

化することもあれば、壯健な人が一夜の中に不歸の客となつて、妻子が路頭に迷ふやうなこともある。其の外、船の難破によつて破産した船主の話や、運送の途中貨物を失つて大損害を被つた商人の話など、災害に關する幾多の悲惨な話が傳へられてゐる。

斯う考へてみると、我々の生活は誠に危険の多い不安なものと言はなければならぬ。そこで災害から起る損害に備へる方途を講じ、それによつて此の不安を除かうとするものが保険である。即ち一人にとつては致命的な大損害でも、若し之を多人數で分擔すれば、一人の負擔は極めて輕微で、殆ど意とするに足らないもの



となる。故に多數の人が、同じ目的の下に集つて一つの團體を作り、其の中の人が損害を受けた場合には、協力して之を救濟しようといふのが保險の趣旨で、他をも救ひ、他からも救はれようといふ、相互扶助の精神に根ざしてゐるのである。

保險事業は、之を經營する者即ち保險者と、保險を附せんとする者即ち保險契約者とが豫め契約をしておいて、保險者は保險契約者から保險料として一定の掛金を受取り、契約中に保險事故が起つた場合には、約束の金額を被保險者又は保險金受取人に支拂ふ仕組になつてゐる。

今日我が國に行はれる保險にはいろいろあるが、主なものは火災保險、運送保險、海上保險、生命保險等である。火災保險は、家屋や物品等が火災のために焼けた場合に、其の損害を填補するための保險である。

運送保險は、陸上及び湖川、港灣等に於ける貨物運送に關する保險であつて、運送中の貨物が火災、水難、盜難等にかゝつた場合に、其の損害を償ふものである。海上保險は、特に海上に於ける事故に限るものであつて、船舶及び其の積荷に對する損害を填補するものである。

生命保險には、終身保險、生存保險、養老保險の三種がある。被保險者が死亡した場合に保險金を支拂ふのが終

身保險、被保險者が一定の年齢に達した場合に保険金を支拂ふのが生存保險である。學資保險、結婚資金保險、徴兵保險などは後者に屬する。養老保險は終身保險と生存保險とを兼ねたもので、被保險者が一定の年齢に達した場合にも、又それまでに死亡した場合にも、保険金を支拂ふのである。

是等の保險事業は、一般に保險會社に於て取扱つてゐるが、又政府でも簡易生命保險及び健康保險を經營してゐる。

簡易生命保險は、小口のみ契約に限られるもので、全國の郵便局で取扱ひ、手續が總べて手輕である。

健康保險は工場や鑛山に働く人々に對する特別の保險であつて、其の人々の疾病、負傷、分娩、死亡等の場合に、醫療を施すとか手當金を與へるとかするものである。保險によつて損害が填補されることは、獨り自分が安心を得るばかりでなく、やがて他に對して取引上の信用を増すことになる。それで諸般の取引が保險を利用することにより、大いに便益を受けてゐる。

## 第十一課 人を紹介する手紙

寒さ厳しく候處皆様愈、御機嫌よくいらせられ候趣御めてたく存上候さて私方お隣に佐藤きみ子と申す方これ有り候年來きやうだ

いのやうに親しく致居候處此の度御家の都合にて御兩親と共に御地へ移らるゝことと相成り何々學校に御轉學あなただ様の一級下におはいらなさるはずに候然るに御地には御知合の方としては一人もこれなく何かにつけて御心細き由度々申され候つては何卒御妹と思し召し萬事宜しく御世話の程願上候かしこ

年 月 日

きよ子

ひろ子様

御許に

第十二課 エジプトの遺蹟

エジプトは五千年の昔に於て、つとに文化の發達著しく、國勢頗る盛なりしが、其の後しばく外國の侵略をかうむりて、興亡幾變遷、當時の都市は悉く荒廢に歸したり。然れども今尙沙漠の間に存する遺蹟を見れば、其の規模の大なる、實に人目を驚かしむるに足るものあり。今其の最も著名なるものの二三を記さん。  
エジプト國現時の首府カイロ市の附近に至れば、處々に雲をしのぎてそびゆる三角塔を見るべし。これ即ち有名なるピラミッドなり。何れも巨石を積重ねて造りたるものにして、如何にして之を積上げたるかは、今日尙



なる塔を建つるには、毎年洪水の季節三箇月間十萬人

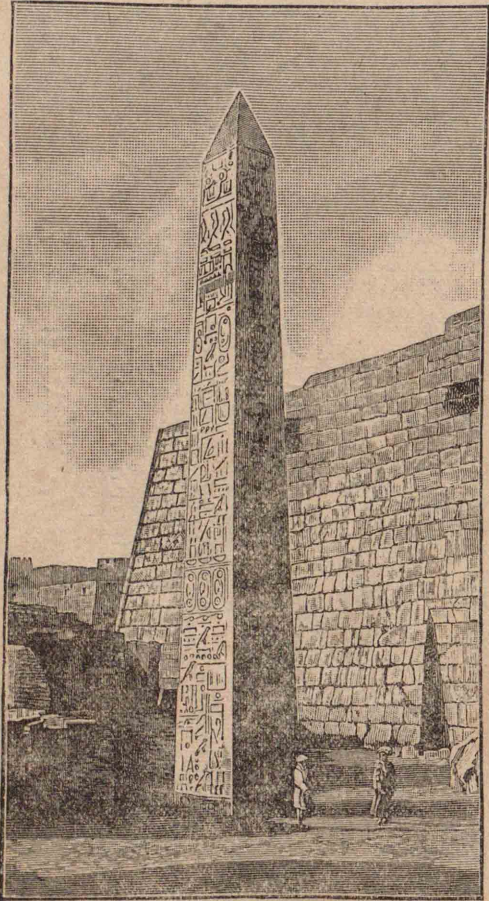
建築學者の疑問とする所なり。其の最も壯大なるものは、高さ約百四十七メートル、底面の一邊長と各約二百三十メートル、底面積約五萬三千平方メートルの廣きに達せり。或史家の説によれば、此の巨大

高讀女二

墳墓の地  
故郷

の人夫を使役して、二十年餘の長年月を要したるなりといふ。ピラミッドは國王及び王族の墳墓にして、内部に室房あり、壯大なる石棺を安置せり。此の石棺中には、數千年の星霜を経て尙朽ちざるミイラあり。

オベリスクは  
宮殿寺院等の  
門前に建てた  
る石碑なり。細  
長き四角の柱  
にして、其の上  
部は尖端に終り、高きものは三十メートルを超ゆ。皆一





本の石にして、多くは花崗岩を用ひ、鏡の如く磨きたる四面には、エジプト特有の文字を彫刻せり。總べて國家の大事、英雄の偉績等を傳ふるために建設せるものなるを以て、エジプト太古の歴史を研究するに最も必要なるものなり。

エジプト文字の研究は早くより試みられたれども、十分に讀解く事能はざりしが、西曆一千七百九十九年、三様の文字にて彫刻せる石を發見せしに、其の一はギリシヤ文字なりしを以て、之と對照して始めて讀得るに至れり。

高讀女二

體と四肢とは獅子をかたどり、頭部は人の形を具へたる異様なる大石像あり。之をスフィンクスと稱す。其の大なるものは、頭部のみにても十メートルに及べり。一対づつ相向ひて列をなすを常とす。けだし宮殿、寺院、墳墓等の裝飾物なるべし。大ピラミッドの近傍にあるもの殊に雄大なり。是等のスフィンクス中には、吹寄せられたる砂中に埋没して、今は唯頭部のみ現れたるものあり。

第十三課 マルコ、ポーロ

コロンブスのアメリカ發見は、世界の歴史上に一時代を劃したる大事業なり。彼が此の大事業を成就するに至れるは、實にマルコ、ポーロの東方見聞記を讀みて、富

源を東洋に開くの志を起したるによる。東方見聞記は、諸國の語に翻譯せられて今も世に傳はり、歴史家の尊重する史料たり。いざやこゝに、マルコ、ポーロの事蹟の大要を語りて、其の貴重なる旅行記の由來を述べん。

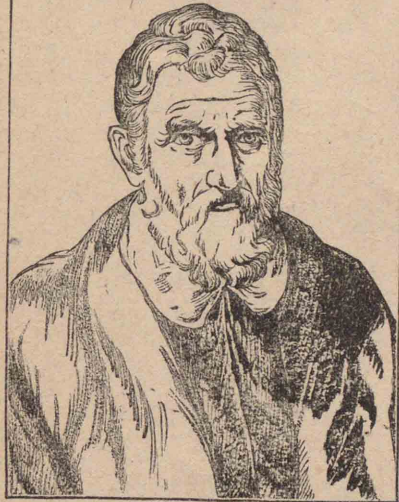
第十三世紀の中頃、イタリヤのベニスヴェネチアの寶石商ニコロ、ポーロ・マフエオ、ポーロの兄弟は、行商の旅先より遠く支那に入りて、元の世祖忽必烈クビライに謁見し、語るにヨーロッパ文明の大概を以てせり。忽必烈之を聞き、キリスト教の力によりて自國を開發せんと欲し、故國に歸りて宣教師を伴ひ來らんことを兩人に委嘱せり。こゝに於て兄弟は國に歸り、二人の宣教師と、ニコロの子にして當

時十八歳の青年なりしマルコ、ポーロとを伴ひて、支那に向つて出發せしが、宣教師は間もなく前途の危難多きを恐れて、二人ながら途中より引返せり。これより兄弟父子三人、遙々とペルシヤを横ぎり、中央アジヤを過ぎて支那に入り、ベニス出發以來四年の歲月を旅路に送りて、漸く元主に謁することを得たり。其の間、山に臥し沙漠に寝ね、或は重き風土病にかさるゝなど、辛苦つぶさに言ふべからず。

さてありし次第を物語りければ、忽必烈其の勞をねぎらひて、厚く之を待遇せり。三人の中マルコ殊に才幹あり、諸國の語に通じたりしかば、或は外國に使し、或は國

務に參與して、頗る重用せられしが、支那に留ること十七年にして、三人共にベニスに歸りぬ。

故郷を出でて二十餘年、一度の音信もせず、今歸り來りても容貌態度總べて變りはてたることなれば、死したるものとのみ思ひゐたりし親族朋友は、其のポーロ父子兄弟たることを信ぜず。よりて三人は一策を案じ、盛



大なる宴會を開きて人々を招待せり。さて其の席上にて、旅中の服を人々の目前に持出して縫目を解き、中より數多の寶石を取出して卓上に並ぶるに、ル

高讀女二

高讀女二

ビー・サファイヤ・エメラルド・ダイヤモンドなど、燦然として目もくらまんばかりなり。これ皆忽必烈恩賜の品々にして、途中の危険を慮りて、斯くは衣服の中に縫込めたりしなり。三人は、人々の大いに驚くを見て、事の次第をくはしく語り聞かせければ、人々漸く其の言を信じ、遂に争つて其の談を聞くに至れりといふ。

マルコ等歸郷の後、ベニスは商業上の競争よりゼノアと戦端を開きしかば、マルコは艦長として出征せしが、戦敗れて捕虜となり、ゼノアの獄中に囚れたり。然るに大旅行家マルコの名は既に遠近に高かりしかば、其の談を聞かんとするもの續々として來訪せり。さればマ

ルコは其の煩に堪へず、こゝに旅行記編述の事を思ひ立ち、たま〜同囚の中にありし一文學者に、昔の記憶を物語りて之を筆にせしめ、遂に一部の書を成すに至れり。これ實に有名なる東方見聞記なり。マルコ後ゆるされて故郷に歸り、天壽を全うして終れり。

東方見聞記には、當時全く東洋の事情に通ぜざりしヨーロッパ人を驚かしたる珍談奇説甚だ多し。又我が日本が、チパンの名を以て、此の書により始めて西洋に紹介せられしは、吾人にとりて最も興味多き事なりとす。マルコは日本を寶の國として記して曰く、

チパンは東海の一島にして、大陸の海岸を去る一

千五百マイルの處にあり。國民は色白く賢くして情深し。無限に黄金を産出すれども、國王は一切輸出を許さず。大なる王宮は全部黄金にてふかれ、床には總べて指二本程の厚さなる金の延板を敷きつめたり。極めて美しきばら色の眞珠、其他種々の寶石も無量にして、此の國の富の無盡藏なること、全く吾人の意想外なり。

## 第十四課 植物と氣象

春は霞がたなびいて、薄曇の日が多い。此の空合に雲かとまがふ櫻の花の咲亂れてゐるのは、よく調和の美を



現してゐる。若しも此の花が澄渡つた秋の空に開いたとすれば、優美艷麗な櫻の特性は、十が一も現れまいと思ふ。又かげろふの立つ春の野に、れんげさうたんぽぽなどが一面に咲亂れて、蝶蜂などの舞遊ぶのは、如何にものどかな景色をつくる。

盛夏の候となれば、快晴の日でも、空氣は水分を含んで、何となく夕立の雲でも起りさうに思はれるが、其の青空に緑滴る木々の枝をさし交してゐるのは、また配合の妙を極めてゐる。やがて秋になれば、空氣が清らかになつて、空があくまで澄んだ中にかへでのみぢしたのや、いてふの黄ばんだ葉が照らし出されるのは、實に

言ひ難い趣がある。冬の寒空に、梅臘梅などが春に先だつて咲いたのもまた似つかはしい。

雨のおもしろいのは、かきつばたはなしやうぶあやめなどの咲亂れる五月雨の頃である降るかと思へば晴れ、晴れるかと思へば降出して、其の度毎に花の美しさを増す殊に是等の植物の花弁と葉とは、自ら雨を防ぐやうに出來てゐて、雨水が小さい玉となつて其の上に留つてゐる美しさは、形容する詞もない。

雨の多い處に生育する植物、又はさういふ地方から移し植ゑられた植物には、自ら雷雨などのほげしい雨にふさはしいものが多い。彼の青桐は其の一例である。直

立して膚の青い幹が、雨に洗はれて一入鮮緑の色を増し、きれ込んだ廣い葉が、はらくくと音を立てて、葉末から餘滴を垂らすなど、如何にもよく其の趣を現してゐる。又はすの葉や芋の葉も、雨の中の風情がおもしろい。葉がぬれないばかりでなく、其の上にたまつた水は玉となつて、一種銀色の美しい光を放つ。

秋雨について聯想される植物も少くないが、先づ人の心を引くのは芭蕉であらう。秋も末になつて、其の葉が破れ、すぢのあらはれたのは、見るからはかなげに思はれるが、其の上に雨のしとくとうち注ぐのは、取りわけて物さびしい。

樅・杉・松などの緑色の葉が眞白に積つた雪の中から現れ出たのや、南天の赤い實が雪の中に際立つて見えるなどは、色彩の配合上、見捨て難い美觀である。節くれ立つた松、しなやかな竹が積雪の重みに堪へてゐるのは、一は剛健、一は清楚の趣を現してゐる。三好學「植物生態美觀」ニ據ル

第十五課 歳末の十日

二十二日 水曜日 日本晴。風もなく、春のやうに暖い。學校へ行く路で、小野田さんと一しよになる。お正月に遊びに行く約束をする。午後、裁縫の時間に、先週出しておいた袴を返していたゞく。札に「甲」と書いてあつた。

歸り、霜解で路が悪いののに、荷物がかさばつて困つた。夕方までつけ物のお手傳。

二十三日 木曜日 曇。風は無いが非常に寒い。授業は今日ぎりまで、道具を皆持つて歸る。途中で女の方に町へ出る道を聞かれ、明神様の前まで送つて上げる。夜、おとうさんの襟巻を編む。

二十四日 金曜日 朝から風が寒く、折々みぞれまじりの雨が降る。學校は終業式だけ。十時頃家に歸る。此の學期も理科が乙だつた。第三學期にはきつと甲にした。と思ふ。山田の叔母さんからお葉書が來た。御病氣御全快、正月は早々おいでになるとのこと。きつと國子さ

んも御一しよに違ひない。

二十五日 土曜日 曇。風は止んだが、今日も寒い。午前はお祖父さんの障子張のお手傳をする。午後、押しつまると忙しくなるから、寒い髪を洗ふ。名古屋のねえさんへお送りするお歳暮の小包を作る。庭のさぐんくわにみそさぐいが來て花を散らして行く。

二十六日 日曜日 晴。今日はすゝ拂の日で、早朝からうち中大さわぎ。午後四時頃漸く片附く。お湯にはいつて夜は早寝。

二十七日 月曜日 朝晴、午後から曇。朝起きると、霜が眞白、水鉢にも厚い氷がはつてゐる。午前中は洗張。

夜、おかあさんと一しよに十時過まで縫物をする。縫ひかけてゐたよし子のモスリンの帯が漸く出来上つた。二十八日 火曜日 起きて見ると雪降。ひる頃漸く止み、夕方から薄日がさす。午前にはいさんと年賀状を書く。午後おとうさんの御用で、佐藤さんへお手紙を持つて行く。をばさんに鉛筆をいたゞいて来る。

二十九日 水曜日 晴。暗い中から起きて餅つき用の意をする。勇ましい杵の音を聞くと、もう春が来たやうな氣がする。小さい良吉まで嬉しがつて餅を運ぶ。私のこしらへたお供への形がをかしいとて、みんなに笑はれる。ひる頃つき終る。つきたての餅のおしるこを食

べて、午後はゆつくり休む。夕方から又曇。窓近い竹の葉に風がさわぎ出した。

三十日 木曜日 曇。おとうさんとはいさんは、朝から門松を立て、神棚をお飾りになる。夕方名古屋からお歳暮のお菓子の包が届く。夜、編みかけのおとうさんの襟巻を編んでしまふ。

三十一日 金曜日 晴。今日は、ごまめ、數の子煮、豆などのお重詰やお雑煮の用意で、朝から忙しい。夕方から一同お湯にはいり、楽しい膳につく。夜、一年中の事をい

第十六課 俳句

元朝の見るものにせん富士の山  
 梅散るや螺鈿こぼるゝ卓の上  
 富士ひとつらづみ残して若葉かな  
 島々に灯をともしけり春の海  
 五月雨をあつめて早し最上川  
 やれ打つな蠅が手をする足を  
 負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな  
 静かさや岩にしみ入る蟬の聲  
 蚊帳の波顔にふるゝや今朝の秋  
 白露をこぼさぬ萩のうねりかな  
 黄菊白菊其の外の名は無くもかな

宗鑑  
 蕪村  
 蕪村  
 子規  
 芭蕉  
 芭蕉  
 一茶  
 その  
 芭蕉  
 千代  
 芭蕉  
 嵐雪

高讀女二

高讀女二

雁の腹見送る空や舟の上  
 雉子たつて人驚かす枯野かな  
 皿をふむ鼠の音の寒さかな  
 水かれて橋行く人の寒さかな

其角  
 一茶  
 蕪村  
 子規

第十七課 都會と田舎

都會と田舎と何れかよき。此の問に對しての答は、恐らく人によりて異なるべし。田舎の人たまく、大都會に出づる時は、其の繁華と便利とに驚きて、或は何時までも此處に住みたしと思ふべく、これに反して、都會の人田舎に到れば、其の風光及び人情の美を羨むべし。げにや都會は繁華なり。街路は四通八達し、大家高屋軒

を連ね、電燈の光は晝をあざむき、車馬の往來絶ゆる時  
なし。又都會は便利なり。電信電話あり、電車自動車あり。  
通信交通の便備らざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あ  
り、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、百般の商店あ  
り。實用に娛樂に、望んで得られざるもの一もあるなし。  
都會の生活を人の羨むも理なきにあらず。されど又長  
く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。物價高  
ければ費え多く、交際繁ければ煩ひ多し。世間は常に忙  
しく、騒がしく、人家密なれば空氣も自ら不潔なり。まし  
て火災の憂も少からざるをや。

田舎には都會の如き繁華もなく、便利もなし。されど其

の山水の美しきこと、空氣のさわやかなること、人情の  
厚きこと、生活に不安少きこと、是等の事は到底都會に  
は求め難き所なり。傳染病、火災等の危険少きのみにて  
も、田舎の生活は人の心をしてのどかならしむ。

斯くの如く、都會と田舎とはそれごとく得失あり、必ず  
しも何れが勝り何れが劣るといふべからず。知見を廣  
め、技能を修め、新に事業を起さんとする者などの、都會  
に出でんとするは、もとよりやむを得ざる所なるべし。  
然れども地方の開発に當り、堅實なる國家の基礎を作  
らんとするものは、宜しく田舎にありて、父祖傳來の遺  
業を守り、確實に生産を營み、進みては周圍の改善に力

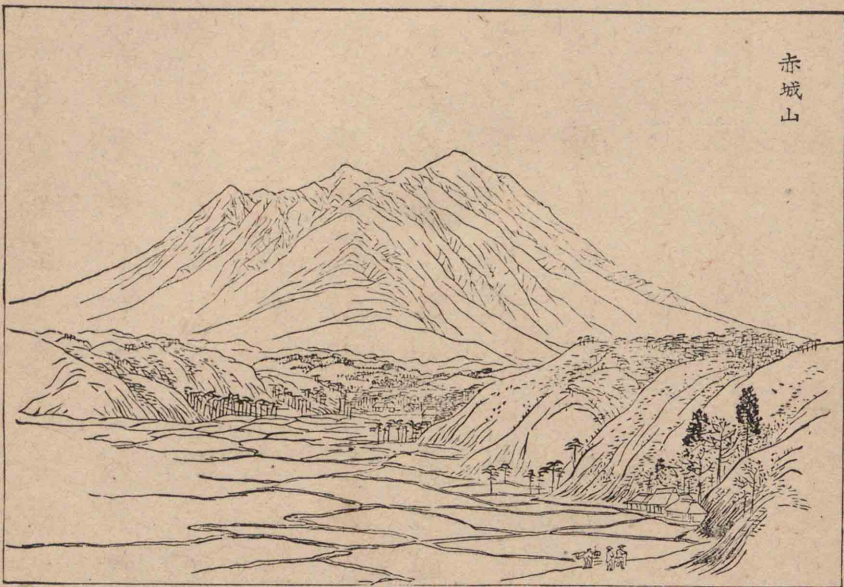
め、以て國家に盡くすべきなり、世には往々確なる目的なきに徒に都會にあくがれ出で、遂に其の惡風に染まりて、身を亡し、家を亡し、父母の名を汚す者あり。戒むべき事にあらずや。

第十八課 上毛の三山

赤城、榛名、妙義の三山は余が生まれた高崎あたりから見ると、名工の忍がける風景畫の如く、東北西北西の三方に展開してゐて、其の背景には、北に子持小野子、西に淺間を始め信越の諸山が遠望せられ、西南に秩父の連山が遠く起伏してゐる。片岡の清水山の如き小高い處から眺めると、赤城の背後に日光の山脈があり、ずつと

高讀女二

赤城山

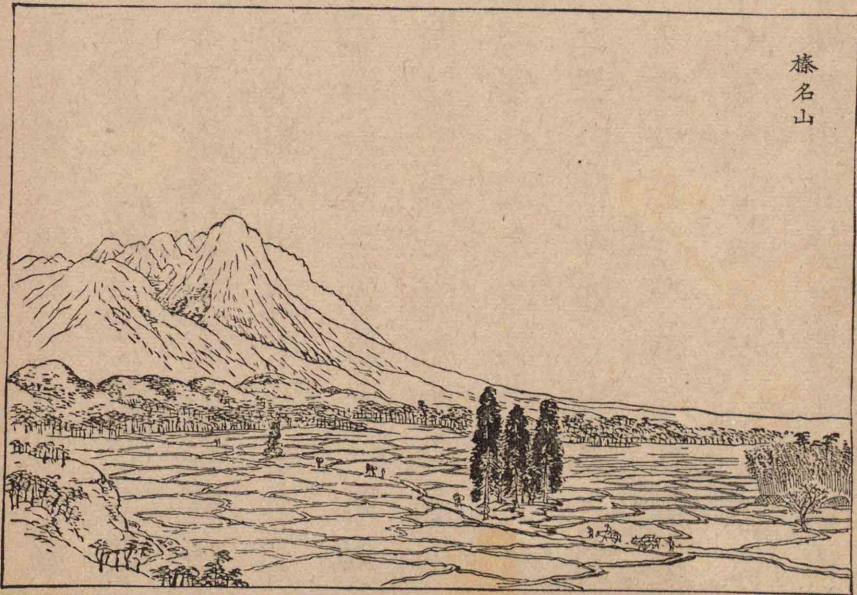


東南の端には、筑波の峯が夢の如く淡く大空に浮いて見える。又碓氷の中腹から眺め下すと、關八州の平野は上毛の三山からさか落しに東南に開けてゐて、眼界の果を筑波が守つてゐる。其の平野の間を、銀の帶の如く蜿蜒としてうねつて行くのが利根川である。

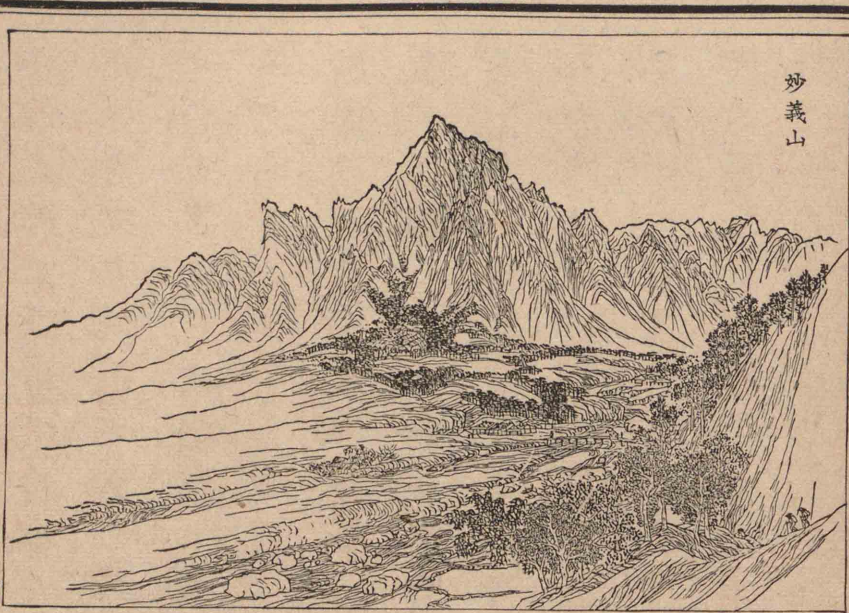
赤城の山容は榛名とは似て

るない。妙義とも全く違つて  
る。妙義山は大昔はもつと  
優しい形をしてゐたのであ  
らうが、雨風にさらされ、土や  
砂が悉く洗ひ去られたため  
に、だん／＼山骨があらはに  
なつて、遂に天にかみつささ  
りな峻しい姿になつたので  
あらうと思はれる。あの不思  
議な形は、人間にたとへたら、  
先づ崎人といふ格であらう。

榛名山



妙義山



榛名は群山の堵列であつて、  
どの山が特に高いといふ程  
のことはない。各の山が仲よ  
く腕と腕とを組合はせてゐ  
るやうに見える。之を人間界  
にたとへたら、郷黨相倚るの  
姿であらう。  
三山にはそれ／＼の特徴は  
あるが、形がよく整つて美し  
く、如何にも氣品の高い點に  
於て、赤城山に勝るものはな



い。遠くから眺めて、幼少な我々が深い印象を與へられたのも、亦赤城山であつた。此の山は姿の美しいばかりでなく、其の色に於ても、他の二山の遠く及ばないところである。

妙義は近く碓氷の方から見れば、一日中何度も變色するが、高崎あたりから遠望すると、紫紺の色に見えることが多い。榛名は大てい青みがかつた鐵色になつてゐる。赤城は淡紅色、藤色、櫻色などと時によつて變るが、上品の中に何處となくほてなところがある。さうして何時も溫和に靜坐して、上毛の山野に君臨する趣がある。形に於て、色に於て、又其の高さに於て、赤城は日本の名

山の一に數へることが出来る。(松本亦太郎渡り鳥日記ニ據ル)

第十九課 日光の杉並木

我が國には到る處に並木がある。或は街道に立連なるもの、或は社寺の參道に並ぶものなど、何れも捨難い趣がある。さうしてそれらの並木の中には、數百年も前から其の地に立つて、人の世の幾變遷を眺めて來たものもあらう。殊に日光街道の杉並木の如きは、其の樹齡に於ても、其の延長里程に於ても、これに匹敵するものは世界中にも少いといはれてゐる。もつとも日光には古くから二荒神社があつて、東照宮の出來る以前、既に道筋に杉を植ゑたことがあるといふやうな話も残つて

ゐる。けれども今日汽車の窓から見るやうなあのりつばな杉並木は、決して其の時からのものではない。

東照宮の出来た時、大名は皆争つて高價な燈籠などを獻じた。ところが其の中に、一人全然變つたものを獻上した人がある。それ



高讀女二

は松平正綱といつて、幼少の時から家康に仕へ、東照宮の造營にもたづさはつた人である。正綱は主君に受けた厚恩と、其の死後までかうして仕へるといふくしき因縁とに感激したのか、永遠に意義あるものを獻上したいと考へて、遂に杉並木を作ることにした。

出来上つた並木は、日光山内から始つて今市に到り、此處から北・東・南の三方に分れ、總延長十餘里に及んだ。正綱の建てた碑の文によると、此の並木を造るには、實に前後二十餘年の歳月を費したといふことであるから、其の苦心もなかく、一通りではなかつたであらう。それから約三百年、其の間にはずるぶんひどい風雨に

も會つたであらうが、成長するに随つて隣りあふ木と木は、二本、三本、多きは七本、互に根本が密着して一本の姿となり、容易に倒れないやうになつた。此の天を摩するやうな大木が幾百本、幾千本と立續いてゐる様は、稀に見る偉觀である。かくて日光杉並木の名は、華麗目もまばゆき彼の殿堂と共に、今は世界の一名物として知られてゐる。

第二十課 日光山

二荒の山もと

木深き處、

大谷の奔流

岩打つほとり、

金銀珠玉を

ちりばめなして、

ひねもす見れども

あかざる宮居。

浮きぼり・毛ぼりの

柱にけたに、

振るひしのみので

巧をきはめ、

丹青まばゆき

格天井に、

心をこめたる

繪筆ぞにほふ。

美術の光の

かゝやく此の地、

山皆綠に

水また清く、

樂園日本の

たへなる花と、

とつ國人さへ

めづるもうべぞ。

第二十一課 一年の折々

「元日や晴れて雀の物語。老いたるも若きもうらゝかにさし上る初日の出を仰ぎ見て、大御代の新年を喜び合ふ。三日までは朝な夕な、雑煮餅を祝ふも、古きならはしとてうれしく、松の内の七日もいつしか過ぎて、八日よりは學校も始る。此の頃は年の中の最も寒き時にて、六七日の頃より二月三四日の頃までを寒といふ。寒明けて立春となる。立春は東風水を解く時なりといへど、東北地方の餘寒の厳しさは寒の中にも劣らず。立春の前

夜は節分にて、家々に「福は内、鬼は外。」と、豆まきの聲の聞ゆる處今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて梅の花も咲初むれば、「梅一輪々々ほどの暖さ。」の時候となる。雛祭は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば桃の節供ともいひしが、今の曆にては花のつぼみ尙堅し。三月六日は皇后陛下の御誕生日にて、此の日を天長節に對して地久節と申し奉るも、臣民の至情なるべし。三月十日は陸軍記念日なり。明治三十七八年の戦役に、我が軍が奉天を占領せし日に當る。彼岸の中日なる春季皇靈祭も過ぐれば、早くも咲出づる彼岸櫻をさきがけにて、四月三日の神武天皇祭の頃は、野も山も皆花の雲な

り。四月二十九日は天長節にて、大君の千代八千代をこ  
とほぎ奉らぬ民草も無し。五月の二日又は三日を八十  
八夜といふは、立春より數へて八十八日目<sup>に</sup>當ればな  
り。苗代の苗やうやくのびて、青き疊を敷けるが如し。五  
日は男の子の節供とて、鯉<sup>こひ</sup>幟<sup>のぼり</sup>の空高くひるがへるも勇  
ましく、二十七日は海軍記念日なり。

六月十一二日の頃より梅雨の節に入り、連日のうつつた  
うしと堪難けれど、農家には大切なる雨なり。七月七日  
の夕は星祭のさゝ竹にぎはしく、盆<sup>ぼん</sup>の精靈祭<sup>しんりやうさい</sup>には燈籠  
の火影物あはれなり。

八月の八日の頃は、曆にては立秋の節に當れども、暑さ

なほ退かず。立春より數へて二百十日・二百二十日の頃  
は暴風雨多ければ、農家は安き心なし。秋季皇靈祭の頃  
となれば、空あくまですみ、夜は蟲の音繁く、さしのぼ  
る月影殊に鮮かなり。かくていつしか新穀も實のり、十  
月十七日の神嘗祭<sup>かんなめ</sup>は近づく。十一月三日は明治節なり。  
明治大帝の御遺徳を仰ぎ、明治の昭代をしのばぬ國民  
も無し。菊の咲きほこり、紅葉の色づくも此の頃なるべ  
し。十一月二十三日の新嘗祭<sup>にいなめ</sup>も過ぎて後は、霜置きあら  
れたばしりて、日も次第に短し。十二月二十五日は大正  
天皇祭ぞかし。残る日數も數ふるばかりになれば、處々  
に年の市など立ちて、人々また新年を迎ふるに忙し。

第二十二課 かんにん

或人文盲なる者を意見して、世の交は他の事はいらす、  
たゞ堪忍の二字をよく守るべし。と言へば、文盲の人は  
頭をかたむけ、かんにんとは四字にて侍らずや。と指も  
て數へ、御許には思し違へなるべし。かんにんと四字に  
て侍り。と言へば、意見せし人、愚なる人かな。堪忍とはた  
へしのぶとよみて二字なり。と言ふ。彼の人また頭をか  
たむけ、たへしのぶならば、また一字ふえたり。五字とな  
り侍るべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、  
四字にてかんにんは致し侍るなり。と言へるに、其の人  
また、汝が如き愚なる文盲は實に諭し難し。人に似て蟲

同様なり。己がまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲  
の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字  
を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざる  
なり。とて笑ひゐたりとぞ。〔雲萍雜誌〕ニ據ル

第二十三課 機

(一)

機を織りましよ、此の機を。

きりはたり ちやうく

松にさつく 嵐が吹けば、雁も鶴も

鳴きつれ渡る。——ちやうく

夜寒に——きりはたり ちやうく

父上様の召します羽織箆の扱ひ  
心をこめて、

布目細かく織上げませう。

きりはたり ちやうく

(二)

機を織りましよ此の機を。

きりはたり ちやうく

日影のどかに鶯鳴けば、椋や櫻の

こずゑもけふる。——ちやうく

花見に——きりはたり ちやうく

母上様の召します裕節の出ぬやう

心をこめて、

縞目正しく織上げませう。

きりはたり ちやうく

第二十四課 海苔

一 海苔探

小春日和の暖い天氣が毎日續くと思つてゐる中に、濱  
の方から吹上げる風が一日々々と肌にしむやうにな  
る。今夜はいやに寒いぞと話し合つた翌朝は、屋根の上  
に眞白な霜が置いてゐる。背戸の引残しの菜に枯葉が  
さして、其の邊に遊んでゐる鶏も日向ばかり探して歩  
く。こんな頃になると、村は海苔探の支度で忙しくなる。

舟から歸つて來る者は、

「今年にはばかに海苔の附きがいゝぞ。」

「もう二寸ぐらゐのびた。」

などと、毎日其の消息を傳へる。

十二月も末近くなると、そろ／＼海苔採が始る。此の時分から二月半ばまではよい海苔がたくさん採れるが、まだ潮の引方が少いので、屈強な者が、時刻を計つて小舟で出かけるに過ぎない。しかし二月半ば後になつて大潮も近くなると、村中女子供まで總出で賑やかに採りに行く。

此の頃、濱にはまだ寒い風がひゆう／＼吹いてゐる。身

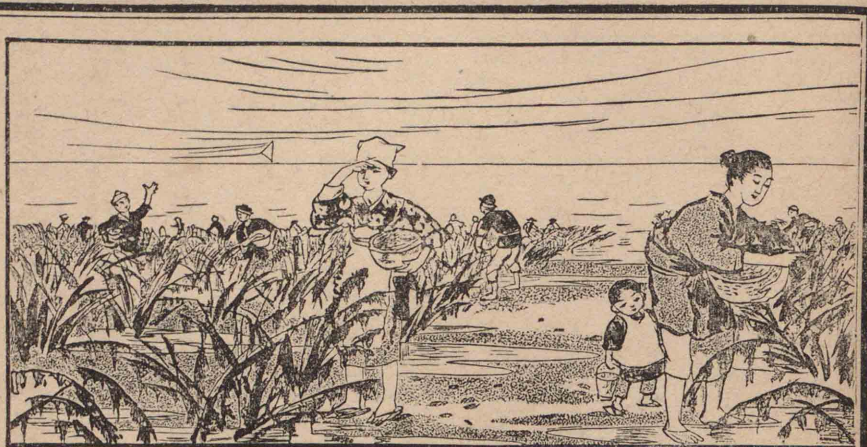
輕に出立つて、手拭をかぶり、襟卷をした一群が岸に立つ頃には、引潮の後の遠い干潟が八九町も續いて、其の先に目ざす筥が一團々と黒く見える。ざく／＼、ざく／＼、荒い砂を踏む足音にまじつて、賑やかな話聲が風にも負けず沖へ／＼と進む。次第に筥に近づいて、引残りの水の中を行く頃になると、先發した舟の人達の歌ふ歌が、手にとるやうに聞えて來る。

筥は一冊の長さが二十間から三十間もあつて、それが幾冊も列をなして並んでゐる。人々は自分の家の目印や名札の附いてゐる持冊の處に別れて、浅い大ざるをこわきに、いよく／＼仕事にとりかゝる。筥は小枝の先ま





で、べつとりと紫黒の色で覆はれてゐる。人々は右手の指を器用に働かせて、のびのよい分だけを摘採つてはざるに入れる。黒い筥の間からは白い手拭の先がちらちら見えて、賑やかな話聲が聞え、美しい歌が其處此處に起る。寒い風が吹かうが指先が凍えようが、人々は愉快に元氣よく仕事を續けて行く。一場所の自分の家の持柵を採終ると、次の場所の持柵に移つて行く。ざるの中には海苔が次第に満ちて来て、どつしりと腕にこたへる頃には、一度引いた潮がまたそろくさし



て来て、さゝ波が足をなぶり始める。人々は採りためた海苔を、洗ひざるといふ深いざるに移し、水の深い處に行つて、棒や手でかき廻して洗ふ。ざるの中の紫黒の色は見るく美しいつやを増して、生海苔の香が高く鼻をうつ。潮はますますさして来る。今まで砂の上に立つてゐた筥は、沖の方のから次々と水につかつて、見るく中にあたりが一面の水になつてしま

ふ。人々は道具を舟に託すと、身輕な足に水を分けて、三五々岸に向つて急ぐ。岸の土手の上では、先に上つた人達が暖かさうにたき火などをしながら、

「早くおいでよう。」

と手招してゐる。

潮はだんく、岸に迫つて來る。其の靜かな波に乗つて、後に残つた小舟も續々歸つて來る。筈はもう大部分水に沈んで、處々に頭だけが點々と黒く見える。

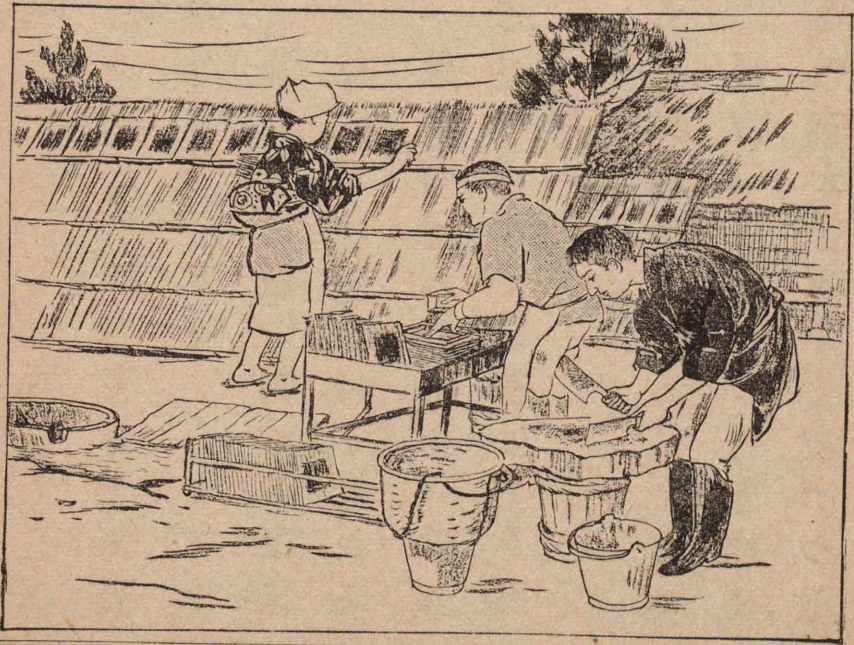
二 海苔すき

探つて來た海苔は、天氣さへよければ、其の日の中か翌朝までにはすいてしまふ。

先づざるの生海苔を二尺四方もある木の臺の上にあけて、まじつてゐるごみを拾ひ取る。それが濟むと、今度は大きい庖丁ばうちょうを兩手に持つて、とんとんと拍子ひょうしおもしろく刻み始める。薄い刃が堅い臺に觸れる度に、紫黒色の海苔の山が次第に崩れて行く。やがてそれが十分細かになつた時、大きい桶かぶに移し入れ、海苔一升に三斗ぐらゐの水を入れて薄める。これで原料は全く出來上つたのである。

すく方法も至つて簡單である。四角な臺の上に、小さい葦簣あしざを二三十枚も重ね、更に海苔の大きさの框かまを載せる。此の框の中に一枚分の海苔水を汲取つてあけると、

水は簀を通して下に流れ、海苔だけが工合よく四角に広がる。それと同時に、右手で上の框をとり、左手で海苔のすかれた簀を起す。框を放した右手は直に左手を助けて、簀は側にある臺の上に斜に立掛けられる。これだけの所作がすばやくしかも器用に繰返されて、重ねられた簀は見る



高讀女二  
高讀女二

見る中に低くなつて行く。

臺の上に立掛けられた簀は、やがて五十枚ぐらゐるもたまると、別の臺に移されて、乾場に運ばれる。

乾場には、傾斜をつけて立てた長い乾臺が幾つもある。運ばれた海苔の簀は、次々と此の臺の上に並べられる。日當りのよい廣場に並んでゐる乾臺が、次第々に薄黒い色に彩られて行くと、蒸發する淡い湯氣にまじつて、優しい海苔の香がそこらに満ちる。

弱い冬の日ざしでも、大てい三四時間もかゝると、乾場一ぱいの海苔は皆乾いてしまふ。すると人々は簀のままそれを家に運んで、一枚々々はがしとり、十枚づつ重

ねては二つ折にし、箱か罐かんに收める。斯うして一日の勞苦は、直にりつばな食料品となるのである。

第二十五課 福澤諭吉

明治維新後の社會に大なる影響を與へたるものは、西洋思想の攝取なり。而して其の思想の紹介者として最も名あるは、福澤諭吉なり。

諭吉は豊前國中津なかつの藩士にして、三歳の時父を失ひしかば、母の手一つに育てられぬ。十四五歳の頃より漢學を學び、二十一歳の時長崎に行きてオランダ語を修めしが、翌年長崎を去りて大阪に出で、緒方洪庵こうあんに就きて更に之を學べり。其の後安政五年、二十五歳、藩主の召に

高讀女二

高讀女二



より始めて江戸に出で、鐵砲洲の藩邸に塾を開きて、藩の子弟にオランダ語を教授せり。

諭吉の江戸に出でたる年は、恰も幕府が諸外國と條約を結びたる時なりき。諭吉其の頃横濱に遊びて外人の店に到りしが、オランダ語にては全く用を辨ぜず、世界の言語中、イギリス語の最も廣く行はるゝことを聞きぬ。こゝに於て大いに發憤し、是より専らイギリス語の研究に没頭したり。

是より先、幕府はオランダより一軍艦を購ひしが、萬延元年春、之をアメリカに遣はさんとす。諭吉、一行中の某氏に請うて其の從者となり、彼の地に渡りて、始めて文明國の實況を視察せり。歸國後、幕府の外國方に出仕し、翻譯の事を司りぬ。

文久元年冬、幕府使節をヨーロッパに遣はすや、諭吉も命ぜられて行を共にし、フランス・イギリス・オランダ・ドイツ・ロシア・ポルトガル等の諸國を巡視せり。諭吉が後年著したる「西洋事情」といふ書は、此の巡視中に得たる知識によること多しといふ。

其の後、慶應三年、幕府事ありて再び使節をアメリカに

遣はしたりしが、諭吉またこれに同行したり。歸國後、鐵砲洲の塾を芝の新錢座に移し、年號に因みて始めて名を慶應義塾と命ぜり。斯くて熱心に教授に従事し、彼の戊辰の役、江戸市中の混亂を極めたる時にても、授業平生に異なることなかりきとぞ。

其の後明治四年、更に義塾を三田に移し、益々規模を大にしたり。時に兵亂漸くをさまり、學に志す者争うて此處に來集せり。諭吉の之を教育するや、總べてイギリス語の書を用ひて、力めて日新の知識を與へ、獨立自尊を主義として、國家有用の材を養成せり。

諭吉は斯く塾生を養成せるのみならず、又大いに書を

著して、或は西洋の事情を述べ、或は外國の地理を教へ、或は理科の知識を與へ、處世の道を説きなどして、普く國民を導きたり。而して其の文章はむづかしき漢語古語を避けて、多く平易なる言語を使用し、力めて通俗を旨としたりければ、人よく之を了解することを得て、其の著書廣く行はれたり。

明治三十三年五月、天皇其の功績を賞して、特に金五萬圓を下し給へり。翌年二月、六十八歳にて逝けり。

第二十六課 品物の不着につきて

春とは申しながら寒さをほ厳しく候處皆々様御變りもなく御過しの由何よりの御事と

存上候さて先月末私まで本二册御送り下され候由今日の御手紙にて始めて承り驚き申候若しや私不在の折などに届き候を其のまま忘れ居り候事もやと早速家中の者に相尋ね候へども受取り候ものもこれなく折角の御親切の空しくなり候ばかりか私には何よりも好きなる本の行方知れぬに口惜しさ限りなく候遠方の事なれば或は途中にて紛失など致候ものにやとにかく一應それぐの所を問合はせたく候へば此の上の御手数誠に恐れ入り候へども何日頃御送り下され候

か御聞かせの程願上候今日まで御禮の手紙  
一つ差上げぬ失禮を何程か御立腹あそばさ  
れ候事と御察し申上候へども右の次第に候  
へば悪しからず御ゆるし下されたく候先づ  
は取急ぎ事情申上げかたぐ御願ひまでか  
しこ

年 月 日

岡田雪江

藤井とも子様

御許に

第二十七課 故郷の花

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん侍五騎、童

一人、我が身共に七騎取つて返し、五條なる三位俊成卿  
の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と  
名のり給へば、落人歸り來れりとして、門内騒ぎ合へり。薩  
摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されける  
は、三位殿に申すべき事ありて、忠度が参りて候ふ。たと  
へ門は明けられずとも、此の際まで立寄り給へ。申すべ  
き事の候ふ。と申されたりければ、俊成卿、其の人ならば  
苦しかるまじ、明けて入れ申せ。とて、門を明けて對面あ  
りけり。事の體何となうものあはれなり。  
薩摩守申されけるは、此の二三箇年は、京都の騒、國々の  
亂出で來、君既に帝都を出でさせ給ひぬ。平家一門の運

命今日はや盡果て候ふ。忠  
 度かねて撰集の御沙汰あ  
 るべき由を承り、生涯の面  
 目に、一首なりとも御えら  
 びに入るを得ばと存じ居  
 り候ひつるに、斯か  
 る世の亂出で来て、  
 其の沙汰も無く候  
 ふは、こよなき歎に  
 候ふ。此の後世静ま  
 りて、撰集の御沙汰



高讀女二

候はば、是なる卷物の中に然るべき歌もあらば、一首な  
 りとも御恩蒙りたく、まかり越して候ふ。とて、日頃よみ  
 置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百餘首書  
 集められたる卷物を、鎧の引合より取出でて、俊成卿に  
 奉らる。

俊成卿之を開いて見給ひて、斯かる忘れがたみを賜は  
 り候ふ上は、ゆめく、疎略には存ずまじう候ふ。と宣へ  
 ば、薩摩守、屍を山野にさらさばさらせ、今は浮世に思ひ  
 おくことなし。さらば暇申して。とて、馬にうち乗り、かぶ  
 との緒を締めて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。俊成卿後を  
 遙かに見送りて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、



「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す。」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいとあはれに覺えて、涙を押さへて入り給ひぬ。

其の後世静まりて、千載集をえらばれけるに、忠度のありし有様、言置きし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の卷物の中に、然るべき歌いくらもありけれども、其の身勅勘の人なれば、名をばあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずとして入れられたる。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな（平家物語ニ據ル）

第二十八課 鳥の翼と昆蟲の翅

近頃は飛行機で空中を自由に飛廻ることが出来るやうになつたので、世間では、人間もいよく鳥の仲間入をしたと言つてゐるが、私は、鳥よりも寧ろ昆蟲の仲間入をするやうになつたと言ひたい。

元來鳥の翼は、動物學上我々の腕に相當するものである。つて、鳥はこれによつて空を飛ぶことが出来る代りに、我々の手や獸類の前肢のやうな作用をするものが缺けてゐることになる。よく子供の繪本などに、鳥や獸が人間と同じく着物を着て、學校に行つたり、家で遊んだりしてゐる繪がある。獸の方は前肢がすぐ手になつて、

至極自然にいつてゐるが、鳥の手には畫家も困るとみえて、いろ／＼にこじつけてゐる。

昆蟲は鳥と違つて、翅と肢が全く別になつてゐる。即ち手足に全然無關係な飛翔用の道具を持つてゐるといふわけで、此の方が鳥よりも寧ろ飛行機で飛ぶ人間に似てゐるのである。昆蟲以外の動物で飛翔するものは、何れも鳥と同じく身體の何れかの部分の變化したものをを用ひてゐる。例へば、蝙蝠の翼は指の間にまくを張つたものと考へてよく、飛魚はひれの延びたもので飛ぶのである。此の點からみると、天使や天狗の翼は、外形は鳥の翼に似てゐるが、全然手足から獨立してゐるか

ら、實は昆蟲の翅に相當してゐるのである。そこで若し實際是等のものが存在してゐるとしたら、其の翼は動物學上の大問題となるに違ひない。

前に言つた通り、昆蟲の翅は獨得のものであつて、初から翅として發達して來た由緒正しいものである。三代將軍家光は諸大名に向つて、我が父祖は元は諸君と同輩であつたが、自分は生まれながらにして將軍である。と言つたさうであるが、若し昆蟲の翅に口があつたら、自分は生まれながらにして翅である。と言ふかも知れない。(三宅恒方「天使の翅」ニ據ル)

## 第二十九課 日本の婦人

上毛野形名蝦夷を討ちて利あらず部下の兵皆四散せしかば、夜に乗じて城を逃れんとす。形名の妻、夫を勵まして曰く、

「夫君たゞ身を全うして、祖先以來の武名をはづかしめ給ふか。」

と、自ら劔を帶び、侍女數人と弓をとりて、盛に弦を鳴らす。賊之を聞きて、城中兵尙多しと思ひ、其の夜圍を解きて去れりと。

非常の大事に會ひて心を取亂さず、能く處すべき道に處して、其の志操の固きこと男子に劣らざるは、我が國婦人の長所なり。爪生保の母が、忠義の爲には愛子の戰

死をも悲しまず、高千穂艦乗組の一水兵の母が、恩愛を忘れて其の子を叱りたるが如き、或はおつなが死を顧みずして主人の子を守りしが如き、皆、我が日本婦人の、非常時に處して誤らざりし例にあらずや。

されど日本婦人の長所は、必ずしも非常の時に於てのみ發揮せらるゝにあらず、平時にありては、良き妻良き母として、能く婦道を守るところに其の美點存す。松下禪尼の儉を教へ、鈴木今右衛門の妻の慈善をほどこし、或は高崎正風の母のよく子を訓育せる、何れも婦人の模範とすべき徳行といふべし。山内一豊の妻が、貧苦に居て夫の一大事を忘れざりしは、戰陣の際に夫の名譽

を全うせる形名の妻と、其の徳を同じうすといふべく、吉田松陰の母が、よく家を治め子を勵まして、其の志を助けたるは、正行の母が、子を戒めて忠を全うせしめたるに比して、必ずしも劣れりといふべからず。

凡そ婦人の道は、夫を助けて家政を治め、子を教へて家名をあげしむるにあり。此の心は何處如何なる場合にも忘るべからず。

されど人世には、思はぬ不幸、驚くべき事變の、何時起り來らんもはかれず。故に平時に於て常に之に處するの道を覺悟し置かずば、時に臨みて心亂れ、氣まどひて、見苦しき行を爲すことあらん。外温順愛敬の徳を守り、

内確固たる志操を持して、如何なる事變に際しても自若として其の常を失はざるは、實に日本婦人の美德なり。

第三十課 學校園

梅は散りて鶯うぐいすの聲も老いたり。春は漸くたけなはならんとす。

果樹園の桃のつぼみは赤くふくらみたれば、五六日を出でずしてほころび出づべく、梨なし・林檎りんごの花もそれより三四日とは後れざるべし。學年改りて、我等が二年になる頃は、紅に白にとりぐの美を競ふ好き時節となるべし。あゝ、望多き春よ。

菊の苗ははや四五寸に延びたり。根分せんも今暫しなり。今年は去年よりも見事なる花を咲かせたきものかな。コスモスの種も蒔終へたれば、花盛の美しさ思ひや。らる。日を追うて成長する草木を見る嬉しさには、草取培ひの骨折も忘れぬべし。

鶏頭の種を蒔くに就けても想ひ出づるは、同じ學の窓に机を並べたる何子の君の上なり。去年の今頃は、共に鋤執りて苗床の手入などせしが、梅雨の頃より病にかかり、九月の新學期、君が植ゑ給ひし草の花咲く頃となりても、君は出席し給はず。斯くて十月の半ば、葉末に結ぶ白露と共に、はかなくも消行き給ひし悲しさ。其の葬

式の日、同級生一同が我が校園の鶏頭を捧げて禮拜せし時、君の近親の人々の泣崩れ給ひし有様、今も尙目に残れり。今年はゆめかゝる凶事の無かれかし。

今年始めて植ゑたる除蟲菊は、害蟲の驅除に必要なものみならず、蚤取粉として、蚊やりとして、効用廣きものなれば、收穫多からば、學校園の収入も増加すべし。

蔬菜園の山東菜、白菜などは、去年も出来好かりしが、大根とかぶらとは甚だ不出来なりき。地味の合はざるためか、又は耕種の方法の宜しからざりしたためか、二年生の擔任せし區域は、可なりの出来なりきといへば、今年は尙一層注意せん。

今年は正月以來度々雪降り、雨量も適度なりしやうなり。去年の夏は長雨打續きて、すゝくわかぼちやなどは甚だ不出來なりしが、幸にして梨柿などは何れも上出來にて、秋の運動會の日には、來賓の方々にも分ちし程なりき。今年は如何あるべき。

月日の過行くは梭の飛ぶよりも早しとか。昨日今日種を下し、苗を移しし花卉、野菜の花咲き實を結ぶも暫しの程ぞ。待たるゝものは秋の日にこそ。

## 第三十一課 世界の望

世界の望は日本に繋がり、日本の望は日本の青年と處女とに繋がる。人類相食まんとする修羅の衢ちまたをして、萬

邦協和、四海同胞の黄金世界となすの責任は、一に我が青年と處女とに繋がる。然も青年と處女とをして、其の責任を果さしむる第一歩はたゞ我が皇道を世界に宣揚して、世界をして向ふ所を知らしむるに存する。しかして其の宣揚や、言論の上でなく、實行の上存する。

我等は決して現在の日本の状態に満足するものではない。しかも、ドイツ、イタリヤの如き、我が國民の皇室中心主義を目標とし、自發的に一致協戮けいりくし、自發的に獻身奉公するを以て、一大模範となしつゝある。いやしくも我が未來の日本を擔當する青年、處女が此の目標に向つて、更に一步を轉じ、眞に日本精神の活ける權化とな

り、活ける標本となるを得ば、東亞と言はず、歐米と言はず、世界の人、皆風を望んで之に同化しよう。これは決して我等の空想ではない。我等の晝夢ではない。我等の雲中の樓閣ではない。現實の問題である。

しかも其の事たるや決して非常の難事ではない。たゞ各個人がめい／＼其の日常の業務を忠實に踐行すれば足りる。一人健全にして一家健全に、一家健全にして一町村健全に、一町村健全にして一府縣健全に、一府縣健全にして日本健全に、しかして健全なる日本がやがて世界の指導者として我が皇道を世界化するに至る。其の順序は、此の如く天日を見るよりも明白である。

希望は天上にあり、實行は脚下にある。萬里の行は一步より始る。決して其の高遠を高遠として回避すべきものではない。やがては、こゝに到達すべき日が到來する。萬一現代の青年、處女が到達せざれば次代、然らざれば其の次代、綿々として絶えず、混々として續くは、我が日本歴史の本性である。且つ特性である。

我等は我が青年と處女との訓練と教養とが日本的にならんことを主張する。彼等をして完美なる日本人たらしめんか、それがやがて模範的世界人たるべきは必然のことである。しかして日本的の訓練と教養とは、先づ日本人たるの自覺心を與へ、次に日本人たるの資格

を與へることだ。日本人たるの自覺の基調は、天皇陛下の赤子であることの自認にある。日本人たる資格の基調は、君國奉仕の精神の存養にある。

しかして、それよりして時代に相應する訓育と修養とが加味せらるべきは勿論のことだ。日本國民は身を以て君國に奉仕せんが爲に生活するものにして、生活せんが爲に君國をして我が身に奉仕せしむるものではない。此の一點に於て歐米功利主義の國民とは全く對蹠たいとくの位置に立つものたることを知るが、日本國民たる第一の資格である。それを其の通りに實行するが第二の資格である。しかしてそれを實行すべく、最も近世的

現代的の環境に順應して善處するの材器、能力を修得するが第三の資格である。

余はすでに老人である。如何に心は逸るも、時の力に抵抗することは不可能である。されば如何に長生を祈るも、とても我が日本の皇道世界化の日を見ることは出來まい。しかも其の日の來るべきを確信して敢へて之を次期の日本を擔當する我が青年處女に囑望する。希くは健全なる日本人たれ。質實なる日本人たれ。勇敢なる日本人たれ。光明開朗なる日本人たれ。堅忍不拔なる日本人たれ。しかして如何なる場合たりとも君國の爲には欣然として一身を獻げる日本人たれ。



果して此の如くんば、如何に日本の前途が多難であつても、如何に日本の周邊に荆棘けいさくが充滿しても、如何に世界の大勢が我に逆行して來ても、決して懸念するには及ばない。如何なる場合でも、眞の憂患は外より來らずして、内より生ずるものである。内を固めよ。しかして内の最も内は、各個人の心の内である。(徳富猪一郎「昭和國民讀本ニ據ル」)

高等小學讀本 女子用卷二終

高讀女二

昭和十五年七月二日 修正印刷  
 昭和十五年七月四日 修正印刷  
 昭和十五年七月五日 修正印刷  
 昭和十五年八月廿三日 翻刻發行

高等小學讀本卷二女子用

臨時定價 金拾壹錢

ぬ

著作權所有

著作兼  
發行者

文  
部  
省

昭和十五年七月五日  
 文部省檢査濟

翻刻發行  
兼印刷者

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
 東京書籍株式會社  
 代表者 石川正作

印刷所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
 東京書籍株式會社工場

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
 東京書籍株式會社

